

ヴァイオリニストTAIRIKの戯言

〔第34回〕

弦が揺れると、僕は季節の風になる

+ 文 佐田大陸 Text by Tairik Sada +

失恋したら料理？

僕たち演奏家をはじめ舞台人は、今回のコロナ禍で自粛を余儀なくされました。自宅でできる仕事をする日々。アレンジや作曲やツアーの準備など、爪を研ぐ時間。

その他の時間はなんせ外に出ないの
で、「何かないかな」と思ったところ、
元々好きな料理に目をつけ、ほぼ毎日
作っていました。肉、魚、野菜、和食、
洋食、イタリアン。生物は、純粹に強
いものでなく、その環境に適応したも
のが生き残ってきた。

「これからの人間界もそんな時代が加
速するのかなあ」なんて思いを巡らせ
つつ、今の自分にとって面白く環境に
適応していけるもの探しをする。

「失恋したら料理をすると気が紛れて
良い」という話を聞きます。

それについては「確かにその場合は気
が紛れるけど、その後、もし誰かと食
事を共にするのでもなければ、作り上
げたその料理を見て余計寂しくなるん
じゃあないのか…」と予想した次第
でございます。

ま、それは置いて、料理の延長
線上で新たにチャレンジをしたのは、
魚さばき。コロナで困っている漁師さ
んから直接仕入れれます。相当値崩れし
ているらしく、漁師さんも大変です。

カレーが届いたので、今までもろくに
魚をさばいたこともないのに、なぜか
五枚下ろしからスタート。難しかった。

基本のアジをさばいたのは、他にも大
きな魚で慣れた後だったのでまあ簡単
に感じました。

(ヴァイオリニスト的には、パガニーニを
弾いた後にカイザーを弾くという感じ
です)

普段からやっている作曲と、料理に
共通する「創作」というものが自分の
根っこにある一番大切な一つとして感
じられたことも、大きな発見でした。

料理も作曲もヴァイオリンも、本質
の共通点は同じ。終わりのない旅は、
最初の自己満足を通り越すと、延々と
途方もなく長く続く光の道が自分の前
に広がります。

自分の人生において、やりたいこと
と、求められること、やれること、そ
んなことについて考えを巡らせまし
た。

いつも作っている鍋料理でも、時期
によって沸騰するまでの時間も違え
ば、トマトの種類でも味が変わるし、
全く同じ味になることはない。自己満
足で作っても、食べる人のことを考え
ないと、残念な結果に終わってしまう
ことも多い。でも自然と湧き上がって
くるものを大切にしたい。

得意な料理のジャンルも見えてくる

けど、制限はしたくない。材料の種類、
素材、新しい出会いが扉を開くことも
ある。

料理＝音楽と繋がる瞬間。

思った音が出ずに、音に振られ壁に
ぶち当たる事が幾度となくあります。
失恋に限らず、どんな失敗でも料理と
向かい合うと、その考えるプロセスが
人生を前向きにで
きるかもしれませ
ん。



2020年5月20日(水)発売
「JITAN CLASSIC」

profile

2010年3月に桐朋学園大学音楽学部大学院を修了。
2 ヴァイオリンとピアノのアンサンブル・ユニット「TSUKEMEN」
のヴァイオリニストでリーダー。
2010年キングレコードからメジャーデビュー。
結成9年目にして450本以上の公演を海外や日本全国各地で開催、
現在までにのべ35万人を動員している。

